



Title	モンタナ紀行
Author(s)	青井, 俊樹
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 74-76
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91585
Type	report
File Information	kikou_aoi.pdf



[Instructions for use](#)

モンタナ紀行

青 井 俊 樹

モンタナ州はアメリカの北西部に位置し、有名なグレイシャー国立公園をもってカナダと接している。ニューヨークを離れること3,000km以上、それでも朝6時30分に離陸した飛行機が（驚いたことにニューヨークの飛行場へは中心街から24時間バスが連絡している）、その日の昼過ぎに着いてしまうのは2時間の時差のおかげでもある。この州は面積約34万km²で日本では広いと言われる北海道の実に4倍以上にもなる。長い方の一辺が800kmもあるのだから、この州を車で通り抜けるだけで1日かかってしまう程である。

朝焼けにけむるマンハッタンの摩天楼をはるかに見おろしつつ、ニューアーク（ニューヨークではない!?) 国際空港を飛びたったユナイテッド航空機は、一旦五大湖上空に出た後南西に進路をとった。真白な五大湖周辺からこげ茶色の乾燥地帯に入っていくにつれて見せる色の移り変りが鮮やかであった。高原の街デンバーで乗り換えた機はグレートプレーンズを横切ってひたすら北上する。何を作っているのかわからないが、冬枯れの一大農耕地帯が見わたす限り広がっている。左の窓からまっ白に雪をかぶったロッキー山脈が見える頃、機はしだいにその高度を下げた。いよいよモンタナである。ピリングスといういかにもローカルな丘珠空港みたいな飛行場へ無事着陸。ワシントン D. C. のユナイテッド航空のオフィスで、モンタナは寒いぞと嚇かされていたので覚悟をきめていたのだが何と暖かいこと、北海道の春を思わせる陽気で、こんな気候の下でクマが冬眠しているとは信じられない程であった。後で聞いた話だが、この頃モンタナ州では数十年ぶりの暖気にみまわれていたそうである。空港を降り立ちやっと一台だけみつけたタクシー（連絡バスもなにもないのである）にどうにか乗り込むことができた。このタクシーの運ちゃんがまたきさくなおっさんというか、乗り込むや開口一番「どうだ空が広いだろう。モンタナ州はビッグスカイカントリーと言なんだ」と説明してくれた。まさしく北海道のそれ、「でっかいどう北海道」そのままである。実際このモンタナ州は牧畜と林業と観光が主たる産業で、気候といい風土といいあるいは人間性といい非常に北海道に似ており、本旅行中もっとも安心感を覚えた場所であった。そのタクシーは目的地の大陸横断バスの発着所にまっすぐ行くのかと思いきや、おおらかとかいいかげんとか途中で診療所のような所に寄り、足の悪いおばあちゃんを便乗させて自宅まで送り届けるというおまけつきであった。その分余計にこちらが料金を払ったわけだが、まあ運ちゃんの人のよさに免じて許すことにした。この運ちゃん、世界中のお金を集めるのが趣味とのこと、乞われて1,000円札と100円玉で料金を支払うことにした。途中立ち寄った銀行でその日の為替レートを聞いての計算なので円高の有難さをじかに味わう結果となっ

た。ついでにチップも50円玉1つ（穴のあいた貨幣は世界的にも珍しいそうである）でも渡してごまかしておけばよかったと後で悔やんだのである。

さてこの飛行場のある町から大陸横断バスに乗り、走りに走って9時間、モンタナの西はずれに近いミズーラという町に午後10時ようやく到着。モンタナ大学教授のジョンケル博士がじきじきにバス停まで迎えに来ていてくれた。ひとまずモンタナ大学学生寮に荷物を置いた後、博士に連れられて町の居酒屋でビールをごちそうになる。そこには博士の研究室の院生（中にはマダガスカル島出身の女子学生もいた）も来ており共にひと時を過ごす。

翌日はジョンケル博士に連れられて副学長に紹介されたあと、博士の受け持つ講義をしばし聞かせてもらうことにする。日本の大学同様遅れてくる学生もおり、なんとなくばつの悪そうな顔をして教室に入ってくる場所も同じであった。ただ我々が入って行ってもジロジロみたりせず気安く「ハロー」と声をかけてくれるところなど多人種社会のよさであろうか。全旅程を通して自分が外国人であるということをあまり意識しないですんだということは精神的にとっても楽であった。

午後からは、博士の息子さんの案内でバイソンレンジやハイログマの調査地のふもとまで案内してもらうことができた。バイソンレンジから望める真白の険しい山々の一面をさして、あの山の中腹に発信器を装着したハイログマ1頭が今冬眠していると教えてくれた。アメリカクロクマと違ってハイログマの分布はアメリカと言えどもかなり奥地や条件の厳しい非常に狭い地域に限定されてしまったという一面を垣間見る気がした。帰り際、荒涼とした冬枯れのはるけくも広がる草原に、悠々と草をはむ巨大なエルクの群れを見つけた。それはまさしくアメリカ大陸の実感でもあった。

翌日はジョンケル博士の研究室の院生の案内でカナダ国境近くまで足をのばし、ハイログマの生息地帯にもなっている広大な森林地帯を案内してもらえることになった。アメリカもこのあたりまで北上してくると、植生も非常に単純となり、森林の構成樹種もロジポールマツやポンデローザマツといったマツ属、ヨーロッパカラマツやモミ類の針葉樹が圧倒的でそれにポプラやヤナギが交じるといった具合であった。林床は非常にすいており、種類不明の（というよりしつこく聞いたのだがメモをしそくなって忘れてしまった）灌木類が多少生育するだけできわめて歩きやすそうであった。ササに覆われた天塩の山を思い浮かべて溜息が出そうであった。ただシクマの生息地としてはかなり貧弱で、十分な食物を得るためには相当広い面積をその行動域として有していなければ生活が維持できないのではないかと思われた。その点エゾヒグマの生息地の方がササが多いとはいえはるかに豊富で多様な食物源を供給しているようである。彼我の個体群の質的量的問題を考察するとき、なかなかきちんとした数値として表面に出にくいこういった生息地の条件の違いを考慮しなければ意味がないと言えよう。さてこの行けども行けども続く森林地帯の何ヶ所かでは、皆伐したまま放置

している所があり、そこだけ積雪で真白になっているのを見ると、何だ奴らも同じことをやるといささか不心得な安心感を覚えたりしているうちに、数100kmの小旅行も終わりをつけることとなった。途中モンタナ大学の演習林があり、職業柄是非見学したかったのだが、すでに夕闇がせまり、かろうじて入口からのぞいただけで中に入れなかったのが残念至極であった。

夕刻寮に帰着後、学生食堂に飯でも食べに行こうかと思っていたところ、教育学部の教授なる人が訪ねて来て、今晚モンタナ大学主催の晩餐会に招待したいとのこと。思いもかけぬ話に戸惑いつつも断る手はないと山帰りのドロ靴のまま高級レストランにて接待を受ける。モンタナ大学や学生の実情について非常に興味深い話を聞くことができ、また臨席された教授の奥さんが何と日本人で、アメリカの生活の実態についても知ることができて、得るところまことに大であった。

実にきれいで静かな大学の構内といい寮といい、真摯に学ぶ環境にふさわしい印象を強く受けたが、それに比べ禁止されているはずのバイクがうるさく走り、タテカンやビラの立ちならぶ北大の構内を思うと、日本の大学には学問の自由とは無縁なあまりに無秩序な自由があふれていると感ぜざるを得なかった。

それやこれやでまだ夜のふけやらぬうちに出発の時刻が迫りきて、あわただしく皆さんに別れをつけ、数々の思いを胸にシアトルにむけ再び大陸横断バスに飛び乗ったのである。またいつの日か訪れることを夢見つつ、モンタナの夜景が照らす光芒はしだいに闇のかたへとすいこまれて行ったのである。(完)

